

■伊都国と委奴国

57年 安曇氏：金印【漢の委奴国王】（後漢 光武帝）

委奴国： 悪文字 「委奴（イナ、イド）」 ⇒ 怡土（いど）国

（注）怡土国は、筑前怡土郡。現在の糸島市前原町が拠点。

（後漢光武帝の後ろ盾により、北九州諸国を支配した。）

AD 57 年、光武帝から委奴国に与えられた金印「漢委奴国王」は、怡土国の消滅に伴い、使わなくなった。 ※ただし、委奴国は、伊那(いな)国とも読める。

その後、常根津彦は、志賀海社に奉納したが、時化で流された。（笠崎宮社伝）

（※山下氏の画像解析では、金印の淵に朱色で4代懿徳天皇の某兄：常根津彦の陰影がある。）

漢委奴国王（※常根津彦の陰影）

安曇氏の拠点（志賀島）



※神武(磐余彦)と金印の関係は、不明。

107年 海部氏：天の忍人「倭国の王帥升等」（後漢 安帝）

伊都国： 良文字 「伊都（イト、イツ）」 ⇒ 巖（いつ）国

（注）伊都国は、豊前みやこ郡。現在の行橋市みやこ町が拠点。

（魏の時代に、倭国への使節が滞在する主要拠点となった。）

（注）隋書では、後漢書の王帥升等を「王・帥升・等」に分離している。

AD107 年、倭国の「王帥升等」=天の忍人（おしひと）は、生口160人を連れて後漢の安帝に朝貢した。 見返りとして、良文字：「伊都国」を認めさせた。

※伊都国は中臣氏の拠点と思われる。伊那国が伊都国に名を変えたと考えられる。

※魏の使者は、加羅～対馬～壱岐～宗像(末盧)～行橋(伊都)へ滞在した。

▼行橋から、船で20日、日向の都万(投馬)へ至る。

▼行橋から、船で10日、八幡浜へ。陸路で1ヶ月、阿波(邪馬臺)へ至る。

(注)福津市の『永島文書』の中に「万津浦(まっうら)」という地名が残っている。

＜参考＞委奴国

『後漢書』「卷八五 列傳卷七五 東夷傳」

「建武中元二年、倭奴国、貢を奉じて朝賀す、使人自ら**大夫**と称す、倭国の極南の界なり、光武、印綬を以て賜う」

後漢の光武帝が建武中元 2 年（57 年）に、奴国からの朝賀使へ（冊封として）賜った印がこれに相当する。

（注）この当時、倭国は伽耶～北九州を指していた。豊後水道より東は未知領域と思われる。

後漢は、高句麗を牽制する意味で、高句麗の南に当たる北九州を重視していた。

後漢は 44 年楽浪郡で高句麗王脱解と戦っている。金印発行は、高句麗王と倭王のみ。

※日本書紀の編纂者は、「大夫」を垂仁時代の丹波の「田道間守」に充てて、隠蔽している。

勘注系図の傍流から同年代を推定すると、建位起命の子の「倭宿禰」（椎根津彦）となる。

※ 阿波古事記研究会では、「倭国の極南の界」を阿波と位置付けている。（国王名は不明？）

しかし、阿波が極南とすると、阿波と委奴国と邪馬臺国の関係が矛盾する。

倭国の極南界は、漢の時代は「豊前（⇒委奴国）」、魏の時代は「阿波（⇒邪馬臺国）」

とも考えられる。阿波ならば、すでに倭国は後漢の属国とみなされていたことになる。

※光武帝は、「倭の伊那国」を、春秋の筆法（一字一面を崩すこと）によって、「委奴国」に文字を置換えて、倭国を蔑（さげす）んだ。当時の大和民族にとって屈辱であっただろう。

筥崎宮（箱崎八幡宮：福岡市東区 鳥居は志賀島方向へ）



※【平原遺跡】 前原市の平原（ひらばる）遺跡は、甕棺に 46.5cm の押紋鏡と首飾り・装飾品が出土している。平原遺跡の近郊には、伊勢神宮に奉納した細石（さざれいし）神社が存在する。



鏡は、古墳に装飾品として、裏面を上にして、割って、埋葬する。

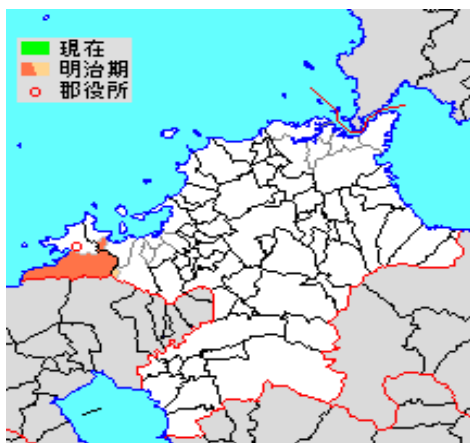
＜表面にすると、光が差したとき、鏡に反射した御魂が外に出て行って、災いを引き起こすと信じられていた。＞

異説：小林恵子説によると、

高句麗は第2代瑠璃王の時から姓は解氏になり、新羅本紀には、「大武神王」は、「脱解王」という名で記録されている。大武神王は、楽浪郡を統治する後漢に攻められ死亡した。

※小林説では、「半島から佐渡島に逃げ、その後、北九州に渡った「脱解」は、後漢光武帝と講和し、「奴（ど）国王」として承認された。」としている。（真偽不明？）

<私見>面白い説だが、脱解が光武帝と旧知ならば、極南界の「大夫」という表現は当たらないだろう。



<参考>明治初年の怡土（いど）郡

対馬県：対馬府中藩

大分県：豊前中津藩

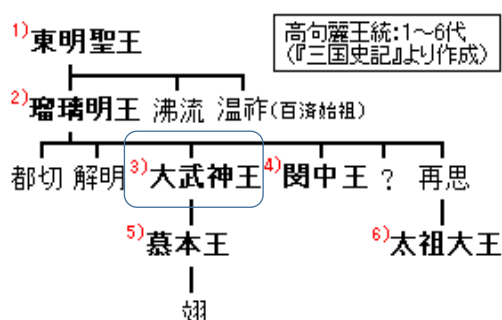
福岡県：筑前福岡藩

真名井神社の社伝には、脱解は多婆那国（≡丹波国）の出身者が新羅に渡り「新羅王」になったという。

※新羅に渡った「脱解」は、さらに高句麗の瑠璃王にも認められ、「大武神王」となった。

<参照>脱解

高句麗 「第3代国王」



王朝	高句麗
在位期間	18年- 44年
姓・諱	高 無恤
諡号	大武神王
生年・没年	4年- 44年
父・母	瑠璃明王・松氏
后妃	元妃、解氏

(注) 44年は、大武神王脱解が死去（偽装）した年。

新羅 「第4代国王」



王朝	新羅
在位期間	57年- 80年
都城	金城
姓・諱	昔 脱解
生年・没年	紀元前 19年?-80年
后妃	阿孝夫人
陵墓	北壤井丘

(注) 57年「金印」の年は、脱解が新羅王になった年。

[万葉仮名「伊都」は、「イツ」と読む。「イト」とは読まない]

万葉仮名「伊都」は、「イト」とは読まない。「イツ」と読む。『古事記』では、「伊都二字は音を以(もち)いよ」などとの割注がついている。すなわち、わざわざ「イツ」と読めとある。

また、『日本書紀 垂仁天皇二年』でも「都」は、「ツ」と読んでいる。「都怒我阿羅斯等(つぬがあらしと)、伊都都比古(いつひこ)」とある。香春町には、都怒我阿羅斯等を祀る現人神社がある。

※福永晋三先生の『魏志倭人伝と記紀の史実―「伊都能知和岐知和岐豆」考』の資料「魏志倭人伝と記紀の史実」に『古事記』の中の「伊都」の記述があります。「都」を「ツ」と読まれる例。

<古事記の万葉仮名「伊都」の例>

- ① 伊都之尾羽張 — イツのおはばり
(上巻 伊耶那岐命と伊耶那美命 伊耶那美命の死)
- ② 阿曇連等之祖神以伊都久神也 — もちイツク
(上巻 伊耶那岐命と伊耶那美命 みそぎ)
- ③ 所取佩伊都之竹鞆面 — イツのたかとも
(上巻 天照大御神と須佐之男命 須佐之男命の昇天)
- ④ 伊都之男建 — イツのをとたけぶ
(上巻 天照大御神と須佐之男命 須佐之男命の昇天)
- ⑤ 以伊都久三前大神者也 — もちイツク
(上巻 天照大御神と須佐之男命 うけい)
- ⑥ 伊都岐奉于倭之青垣東山上 — イツきたてまつれ
(上巻 大国主神 大国主神の国造り)
- ⑦ 伊都之尾羽張神 — イツのおはばりの神
(上巻 忍穗耳命と邇邇麻呂命 建御雷神の派遣)
- ⑧ 伊都岐奉 — イツきたてまつれ
(上巻 忍穗耳命と邇邇麻呂命 天孫降臨)
- ⑨ 伊都能知和岐知和岐豆 — イツのちわきちわきて
(上巻 忍穗耳命と邇邇麻呂命 天孫降臨)
- ⑩ 近淡海之御上祝以伊都久天之御影神 — もちイツク
(中巻 開化天皇)
- ⑪ 葦原色男大神以伊都久之祝庭手 — もちイツク
(中巻 垂仁天皇 本牟智和氣の御子)
- 右の何例かは、「伊都二字は音を以(もち)いよ」などとの割注がついている。すなわち、わざわざ「イツ」と読めとあるのである。

* 福永晋三先生の講演(YouTube)より引用

万葉仮名「伊都」(古事記)

<日本書紀(垂仁天皇二年)の万葉仮名「伊都」の例>

万葉仮名「伊都」(日本書紀)

一云 御間城天皇之世 額有角人
乘一船泊于越國筭飯浦 故號其處曰
角鹿也 問之曰 何國人也 對曰
意富加羅國王子 名都怒我阿羅斯
等 亦名曰于斯岐阿利叱智干岐 傳
聞日本國有聖皇 以歸化之 到于穴
門時 其國有人 名伊都々比古 謂
臣曰 吾則是國王也 除吾復無二王
故勿往他處 然臣究見其為人 必
知非王也 即更還之 不知道路 留
連嶋浦 自北海廻之 經出雲國至於
此間也

(垂仁天皇二年)

* 福永晋三先生の講演(YouTube)より引用

※『播磨國風土記』揖保の郡 石海(いはみ)の里 :「都(つ)」の例

伊都(いつ)の村、伊都と稱くる所以は、御船の水手等(かこども)の云ひしく、「何時(いつ)かこの見ゆるところに到らむかも」と云ひき。故、伊都といふ。

伊都村。伊都というわけは、皇后のお召し船の水夫らが言ったことには、「将来のイツ(何時)か、この見えているところに 行き着いて暮らしたいものだなあ。いい村だ」と言った。だから伊都というのである。

■倭奴(イヌ)国と伊都(イツ)国

太安万侶の教養を推し量るとき、彼は『日本書紀』の編纂にも関与しているから、魏志倭人伝中の「伊都国」を認識していたことが知られる。そうすると、一方の古事記に著した下記の①、③、④、⑦の「伊都」を同じ地名・国名として認識していたのではなかろうか。

しかも「古事記の伊都」はほとんど「天孫降臨」以前に出現している。この重要性に私は気づいていなかった。

① 伊都之尾羽張 — イツのおはばり(上巻 伊耶那岐命と伊耶那美命 伊耶那美命の死)

伊耶那岐命が伽具土神を斬る所の刀の亦の名こそ、「伊都之尾羽張(イツノヲハハリ)」と謂う、とある。

私は先に、直方市「多賀神社」の祭神伊耶那岐大神が、古事記に「坐二淡海之多賀一也」とあるのを指摘している。「伊都」が地名である可能性がここにある。

③ 所取佩伊都之竹藪而 — イツのたかとも(上巻 天照大御神と須佐之男命 須佐之男命の昇天)

④ 伊都之男建 — イツのをとたけぶ(上巻 天照大御神と須佐之男命 須佐之男命の昇天)

③④は天照大御神が須佐之男命を高天原に迎え待つときの軍装と雄叫びを上げる箇所に出てくる。

ここの「伊都」も固有名詞と考えられる。

⑦ 伊都之尾羽張神—イツのおはばりの神(上巻 忍穗耳命と邇々芸命 建御雷神の派遣)

国譲りの初めに出てくる。

《ここに天照大御神の詔りたまはく、「またいづれの神を遣はさば吉けむ」とのりたまひき。ここに思金の神また諸の神の白さく、「天の安の河の河上の天の石屋にます、名は伊都の尾羽張の神、これ遣はすべし。もしまたこの神ならずは、その神の子建御雷の男の神、これ遣はすべし。(後略)」とまをしき。》

とあり、「伊都の尾羽張の神」が出現する。①との関連が深く、「伊都」が地名である可能性がいよいよ高い。

すでに、私は「天満倭」考(越境としての古代2)において、

《「天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊(あまてらすくにてらすひこあまのほあかりくしたまにぎはやひのみこと)」が 三十二将・天物部(あまのもののべ)等 二十五部族を率いて豊葦原の水穂の国に降臨。(天神本紀)垂仁天皇十六年(紀元前十四年)、天照大神こと饒速日尊が 笠置山(四二五m)に降臨。(天照宮社記等、天照宮は福岡県鞍手郡宮田町磯光に鎮座する)》

を掲げ、天孫降臨ではなく、天神降臨こそが「倭奴国」の起源であるとした。

そうして、卑弥呼を共立したときに「伊都国」となったとも記した。魏志倭人伝には、行程記事の後に、さらに伊都国の記事がある。

女王国より以北には、特に一大率を置き、諸国を檢察せしむ。諸国、之を畏れ憚る。常に伊都国に治し、国中に於いて刺史の如き有り。

王使を遣はして京都・帯方郡・諸韓国に詣らしめ、及び郡の倭国に使用するや、皆津に臨みて搜露し、文書・賜遺の物を伝送して 女王に詣らしめ、差錯するを得ず。(中略)

其の国、本亦た男子を以て王と為し、住まること七八十年。倭国乱れ、相攻伐すること歴年、乃ち共に一女子を立てて王と為す。名づけて卑弥呼と曰ふ。

ここには、冷静に見るかぎり、伊都国の現状と特別の地位が記され、卑弥呼即位前の倭国すなわち倭奴国の歴史とが連続して記してあるとしか考えられない。